

校長だより 7月

大人が人権を考える大切さ

先日、私の手元に「全国中学生人権作文コンテスト」の入賞作文集が届きました。いつも、中学生が人権について考えている作文を読むのを楽しみにしています。読んでみると、子どもたちのたくましさや純真無垢なところ、正義感などを感じて、この子らの将来に大きな希望の光を感じ、大人である自分自身も、もっと学ばなければならないと感じます。

今日はその作文集の審査講評に作家の落合恵子さんが書かれている文を紹介します。

昨年、2024年11月に亡くなった詩人、谷川俊太郎さんが翻訳された絵本に「ベンのトランペット」という作品がある。

主人公は、タイトルにもあるようにベンという名の少年である。もう一人の主人公ともいえる人物が、近くにあるジャズクラブで演奏しているトランペット吹きで、ふたりともアフリカにルーツを持つアフリカ系アメリカ人だ。従来「黒人」と呼ばれ、長い間、不当にも人種差別の対象とされてきた存在である。差別は残念ながら、今もって残存している。

ベンはジャズクラブの外で、演奏を聴いている時間ももっとも幸福だった。どの楽器も素晴らしいが、とりわけ彼のお気に入りにはトランペット。しかし家が貧しくて買うことができない。欲しい、と言葉にすることもできなかった。だからいつもベンは、吹く真似をする。流れてくる音色に合わせてである。

クラブのトランペット吹きはそんなベンに何かと声をかけてくれる。トランペットを所有することができないので、吹く真似をする彼を見てトランペッターは言う。

「いかすラッパじゃねえか」。そしてある日、憧れのトランペッターはベンの肩に太い腕を回しているのだ。「クラブへ来いよ。いっしょにやってみようじゃないか」。

心がささくれだつたと感じる時、私はこの絵本を開く。むしろ、大人が読みたい本として、大人向けの雑誌や新聞にこの絵本を紹介したことが度々あった。私たち大人がこのトランペッターのように若者や子どもたちを見ているか、接しているだろうか、と。

さらにこの後の文に、応募作品の中に何点か氏名「非公開」の作品があり、それが増えてきていることに憂いを感じられています。そして、こうも言うておられます。

SNS などの拡散で、誰かがスケープゴートにされたり、誰かが英雄視されたりする時代であり、社会である。差別のない社会を求め、自らの考えを書いた中学生が、氏名を「非公開」にしなければならない社会、公開を恐れなくてはならない時代とは、民主主義とは逆行する社会だ。氏名を「非公開」とせざるを得ない人が、人権を拓く立場で作品を書いている人の中にも存在する。そのことを、私たちはしっかりと考えたい。※スケープゴート：他者の罪や責任を代わりに負わされる人や物のこと。「身代わり」「いけにえ」

今のこの国の風潮にも感じられる多様性や特殊なものを差別する何か全体主義的なものに対して、私自身も憂いを感じます。人と違うことが否とされる世の中、そんな危機感を感じつつ、この文を紹介しました。